
黒旅

鼠由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒旅

【コード】

N5088J

【作者名】

融

【あらすじ】

自分はいったい誰なんだろう

白い田舎

ゆらゆらと鏡の破片が舞い降りている・・・
その破片一つ一つに自分の記憶がある
破片がおちていくに連れて周りが少しづつ真っ暗闇に染まっている
体が何かを切る
生々しい臭いがする
何故だろう

赤黒い色をした男が自分を見ている
胸が焼けるように苦しい
目が閉じていく・・・
ゆっくりと完全な暗闇の中へ

いつか自分に光を注ぎ込むまでずっと待っている
どれくらい時間がたったのだろうか・・・
暗闇の中で眠っている

「このまま永久に目をつむったまま消えるのかな・・・」
そのまま漆黒の海へと流れる寸前だった
隣に暖かい光を放つ白いバラが見えた
「だいじょうぶ・・・君は・・・もう」

その光が一瞬にして周りを照らした
気がつけば周りは真っ白な雪
そしてとても胸が焼けるように苦しい
このままでは目を覚ましてくれたあの花に会わず顔がない
残りわずかの力を振り絞って立ち上がり前に歩いた
「向こうに光を感じる・・・」

気のままに長い時間歩いて行くと建物が見えた

「あの建物まで耐えてくれっ……」

すこしづつ歩いていく

自分が通った後には赤い雪

意識がぼんやりとうすれてきている

「もうすぐそこ……後一步踏み出せば……」

目の前にドアが見えた

すぐさまドアをノックした

すると中から「こんな時間に誰だ」

つと言いながらおじさんがドアをあけてくれた

おじさん「な、なんだお前！！大丈夫か！！」

「た……すかつ……た……」

目を閉じてゆっくりと倒れた

目が覚めるとボロボロのソファアの上で横になっていた

「イタツ！……」

おじさん「おお目が覚めたか……寒いだろうこれを飲むといい」

温かいコーヒーをくれた

おじさん「お前旅人だろうどっらきたんだ」

自分は下を向き考えた

（自分はいつたどこから来たのだろう）

目をして「わからない」というと

おじさん「わはははは！！！！まあいい今は頭が混乱しているのだろ

うゆっくり休むよい」

自分はコーヒーを飲み横になって目をつむった

心の奥底に誰かが立っている

やっと僕の存在に築いてくれたね

「君はだれ……？」

僕は君と同じさ……

「僕は誰？」

おやおや・・・自分の名前さえも忘れてしまったかい？

まあ仕方ないよねえ・・・いずれわかるさ・・・自分はいつたい何者なのか

あははは、あはははははははははは！！！！！！

おじさん「おい・・・おい！！・・・」

気がつくとも汗でびしょぬれになっていた

おじさん「どうしたんだいっ、さつきからかなりうなされていたらぞ？」

とてつもなくリアルな夢を見た

僕の中にもう一人の僕・・・

「おじさん、ここはどこなんですか？」

おじさんは窓を開けて外に指を刺した

その先には看板が立ってある

「ホワイトカントリー」

おじさん「ここは雪が一度も溶けたことがない白い田舎さ毎日雪が降ってはつもり降ってはつमりの繰り返しさ、そのせいでここに住んでいる人たちは皆迷惑している、暑い水をまいて溶かしているのだが一向に陸が見えないしかも屋根の上に雪がつもり家がつぶれてどこにも住む場所がなく死に絶えたやつだっているしなあ」

悲しそうな顔で外を眺めるおじさんを見るのはとてもつらかった

その時外から大きなものが倒れたような音がした

おじさん「まさか！！！！・・・おい小僧そこでじつとしてる！！」
つと行って走って外へ出て行った

「僕には何もできないのか・・・いや！そんなことはない！！！！」
服に着替えて外へ出て足跡を見ながらおじさんについていくことにした

雪の恐怖

おじさんの後を追っていくとその先に崩れた家があった

どうやら雪に押しつぶされたらしい

「すごい・・・家が雪に押しつぶされている」

家の近くまで来るとおじさんが立っていた

おじさん「お前も来たか・・・どうだ？雪のせいでこの有様さ・・・
見ている無言でただ突っ立って見ていることしかできない・・・」

無言で見ているだけ・・・か・・・悲しい言葉が胸に響いた

この家に住んでいる人はきつと家に押しつぶされているのだろう
????「そ、そんな・・・いや・・・いやーーーー!!!」

後ろから女の子が走ってきた

きつとこの家に住んでいた人だ

父と母が死んで少女だけが生き残るなんて運の良い子なんだろう

おじさん「かわいそうにな・・・これもすべて祟りなのだろうか」

祟りというのに気にかかった

「祟り？」

おじさん「祟りさ・・・雪の精霊だよ・・・ここから少し歩いたと

ころに雪の神殿があるんだ、そこに丸い雪が2つ置かれているんだ・

・それがなぜかその雪が溶けている、それで雪の精霊が祟りを起
こしているのさ」

雪の精霊のせいだと言う

何故かその場所に誰も行かない

「なぜその場所に誰も行かないんだ？」

おじさん「神殿の手下がいるのだよ、入ろうとすると敵と勘違いし
て襲い掛かってくる」

手下が神殿の中に入ろうとすると敵だと勘違いして襲い掛かってくる
当然の話しただ中に入れなければ何もできない言ったって引き返すし
かない

反抗すれば殺される

その時あの言葉を思い出した

おじさん「ただ無言で突っ立て見ていることしかできない」

その言葉を思い出すと怒りがこみ上げてきた

「おじさん！僕行きます！なにか秘密があるはずなんです・・・それに・・・自分が誰なのかわかるかもしれない気がするんだ・・・」

その言葉におじさんは驚きを隠せず

おじさん「なにを言っているんだ！死ぬかも知れないんだぞ！！！」

「！」

・・・（やめ け！！死・かも れない だぞ！！）

自分の思いを言葉に変えるように

「僕は恩返しをしたいんだ！」

つと言つと女の子が近づいてくる

女の子「おにいちゃん・・・この村を救ってくれる？」

「もちろんだよ助けてあげるよ」

おじさん「なにやってんだ！ついて来いお前に返すものがある！」

急いでついて行くとどこかの倉庫の中に入った

おじさん「これだ・・・」

おじさんは白と黒の双剣と白いバラを持ってきた

白いバラを手に持ち目をつむって声をかけた

「これは・・・やつと君に出会えたよ・・・」

白と黒の双剣を手に持った、何かを感じる

おじさん「不思議な物をもっているんだな、どこで手に入れた？」

頭を抱えて考えてもわからない

「わからない・・・なんのためにこんなものを持っていたのか自分が何者なのか・・・でもわかるんだ、自分はこれを使い慣れている」と

つと言つて空を見上げた

おじさん「行くなら明日にしよう外も暗いしこれから吹雪が来るか

らな、後あの女の子も気になるからな」

そういえばと思いい出す

「おじさん！名前は？」

おじさん「アイジだ、別におじさんのままでいいぞ、それよりお前の名前はなんだ？」

自分の名前を知らない、白いバラの花びらをよく見ると「ホリーズン」と書いてある

ホリーズン「ホリーズンだ！」

アイジ「よろしくなホリーズン！さあ家に戻って眠りにつけ明日の朝は早いぞ！俺は女の子を捜してくる」

そのまま家に帰りソファアの上で眠りに着いた

歪み

朝になり目が覚める

やけに静かな朝だ

おじさんの部屋に行ってもおじさんはいない

外に出ると雪の向こう岸から女の子が走ってきた

女の子「おにいちゃん！こっちに来て！」

ついて行った先には大勢の人々が集まっていた

おじさん「おーい！こっちだー！」

つと呼ぶと人々はこっちを向いた

「あなたがホリーズンさんですね！」

「お願いします！この村を救ってください！」

おじさん「つとということだ！お前ならできる！俺は信じているからな！」

見送りという事か

自分は少しにうれしいさを感じた

その時自分の奥底の何かが動いた、この村を救い生きて戻ってくることをいのつてくれる人々のために

おじさん「わつははは！驚いたか！まあ少し人数は減ったが助けてくれることを祈っているぞ！これが地図だ、雪に地図をおいてみる」
言われたとおり地図を置いてみると雪が溶けていく

ホリーズン「え！？」

そして雪がそのまま向こう岸まで一本の線になって溶けていく

おじさん「さあゆけ！ホリーズンに命よあれ！」

「ホリーズンさんに命よあれ！」

自分の足が地図に導かれ今歩き出す

雪を進んでいくと動物たちが後ろからついてくる

ホリーズン「僕を神殿まで一緒に連れてってくれるんだね……

ありがとう」

進んでいくと目の前に暗い丸いものが浮いている

ホリーズン「これは・・・なんだろう」

触れようとすると周りが暗闇に変化した

そして目の前に雪で作られた遺跡がある

ホリーズン「これが・・・雪の神殿・・・闇に落ちている」

入口には黒い目を光らせた騎士が2体立っている

どうやらもうこちらの存在に築いているらしい

すっところちらを向いてくる

ぼーとしていると服が黒色に変わっていく

ホリーズン「ぐっ・・・ぐあ・・・はあはあ・・・ぐあーっ！・・・

意識が朦朧とする

胸の奥底から聞こえてくる

(苦しいかい？・・・交代しようか？)

ホリーズン「や・・・めろっ！！！」

(恐れなくてもいいんだよ・・・僕は怖くないよ・・・恐れないで・・・ふふふ)

ホリーズン「やめろ~~~~！！！！！」

自分の気が変わった

「ふっ・・・しっこいやつだ」

神殿に入ろうとすると騎士が剣を自分に向けた

「おやおや・・・僕にそんなことしていいと思ってるのかな？・・・

まあ言うまでもないけど邪魔すると消すよ？」

騎士「才前・・・ソウカ・・・通行ヲ許可スル」

つといい剣を直し騎士は黙り込んだ

「ふん・・・やけにおとなしいね、まあいいよ通さしていただくよ

入口を通り中へ進んでいくと黒い氷が先を通せんぼしていた

「くっ・・・邪魔だ！！！」

白い剣で黒い氷切り裂き氷を消した、その先には溶けた丸い雪と白い光に被われた丸い雪があった

「これか・・・くっ！さっきの黒い氷が闇を生み出していたのか！
・・・まあいいよこの体、君に返すよ」

つと胸を手で押さえ眠りについた

ホリーズン「はあ・・・はあ・・・助かったようだな・・・それにしてもここはどこだろう」

周りを見わたし白い光りに被われた丸い雪と溶けた雪が目に入った
ホリーズン「これがおじさんが言っていた雪か・・・周りに落ちて
いる雪を溶けた雪に固めておいた」

すると目の前から吹雪がふいてきた、その先に全身氷付けの男の子
が現れた

雪の精霊「主が我が身を救った者が・・・礼を言わせてくれ、あり
がとう」

つと雪の精霊が礼を言ってくれた

ホリーズン「その礼に感謝いたします、お聞きしたいのです・・・
ここでいったいなにがあったのですか？」

そういうと雪の精霊は答えた

雪の精霊「ここに突然、大勢の魔物達が現れたのです・・・必死に
対抗したのですが無駄だった、余りの闇の力にこの地を闇の深く底
へと落とされてしまった・・・我が身がもつと強ければ！！！」

雪の精霊は怒りにあふれすこし闇を出しているのが見えた

このままでは雪の精霊自体から闇を生み出しつつあると思い

ホリーズン「雪の精霊・・・この僕に任してください、その憎しみを
受け止め必ずや敵を討ちます！」

そう言うつと雪の精霊から闇が消えた

雪の精霊「すまない・・・少し怒りに自惚れていた、頼んだぞ少年
・・・ん？主よ心が欠けているぞ？魔物に奪われたか？いや？記憶ま
でも奪われてしまっているのか、だが主は自らあたらしい心を作り
出そうとしているお主の中で闇の力と光りの力が真つ二つに分かれ
てしまっておるな？」

雪の精霊は自分の奥底まで読み取った

旅時

村へ帰るにつれて雪が少しづつ減っていきつと村へついたら雪はもうないであるう、そう考えながらも村へ近づいていく

するとなにやら村が騒がしい

おじさん「ホリーズン！こっちだー！皆！ホリーズンが帰ってきたぞー！」

つと手を振ってくれた

「ホリーズンさん！ありがとうございます！おかげでこれからは死人が出ることもなくなりました！」

お辞儀おしげをしながら村人達が感謝をしてくれた

来る前まで人影をあまりみなかったけど今は人影が多い皆の顔も笑顔になっていた

ホリーズン「それはよかった、僕もうれしいよ」

女の子「にいちちゃん！今白いバラの種を埋めてるの！」

白いバラを聞いた自分はうれしくなった

ホリーズン「それはうれしいよ、元気に育ついいね」

するとおじさんは看板をいきなりつぶしだした

おじさん「今日からここはホワイバラーズだ！ここに綺麗な白いバラを育てるぞ！ほらほら！今日からいそがしくなるぞー！」

皆は種の袋を持って埋めに行った

ホリーズン「おじさん！僕まだ旅を続けます！ここから近い村はありませんか？」

つと言うとおじさんはポケットから金を出して東へ指を指した

おじさん「ここから東へ行くと黒い城が見えるはずだ、行くまでに魔物や怪物が出るだろう・・・気をつけて行くがいいあこの金はお礼だ、これで何か買つといい」

ホリーズンはお金を受け取り東へ向き

ホリーズン「またここにいつかかならず来ます、だからどうか忘れないでください・・・これを」

つと自分はバラをおじさんに渡した

おじさん「わかった・・・じゃあな勇者ホリーズン！」

ホリーズン「アイジもこの村のことよろしく！」

つと手を振り村を去って行った

南へ歩いている途中に何回も魔物が現れた

少々手間取ったが先へ先へと歩いて行く

気がつくとも森の中にいる

どこまで歩いただろうと空を見ると少しだけ黒い城が見えた

あそこかと思えるほうへ歩いて行く

すると門が見えた、番人が立っている

番人「何奴だ！ここを通りたけば悪者ではないという証拠を見せてみる！」

つと言われても何も見せるものがない

ホリーズン「なにを見せればいいのでしょうか？」

すると番人は

番人「光属の魔法をなにかとなえるだけでよい」

とりあえず光を頭の中で思い出した

すると目の前に光の暖かい空間ができた

番人「こ、これは！！・・・失礼しました！！どうぞおとうりください！光の国へ！」

門が開くとまるで明るい遊園地へ来たかのように暖かい感じがした
入るとすこし体が軽くなった、気がした

ところが困った事に宿がどこにあるかわからない

しかも情報や手に入れにくい

しかたない、村人に聞くか

ホリーズン「すみません宿はどこにあるんですか？」

「宿？そこを曲がって裏通りに行けば・・・何しに行くの？」

不思議に思われる、なぜだかわからないがなにかいやな予感がした

ホリーズン「泊まりに行くんです、あと情報屋などは・・・？」

「情報屋？・・・しりません」

しかたないとかく宿にいつてからだと思

ホリーズン「ありがとうございました」

宿に行くにつれてだんだん暗い道になっていく

自分は築いた、ここはなにかがあると

裏闇

言われたとおり裏道を通る

するとボロボロの宿を見つけた

ホリーズン「なぜあそこだけがボロボロなんだ？」

近づくとも中から騒がしい声が聞こえる

耳をドアにあてて聞いてみると

「いつになったら金をはらってくれんだよ！！こっちはずっと待つてんだよ！このままじゃ俺が王様に殺されるかもしれねーんだぞ！

！！」

つと声を高く男が年をとったおばさんに言ってる

おばさん「そ、そこをなんとか・・・おねがいします！」

すると男は手を出した

このままではまずいと思った自分はドアを開けた

ホリーズン「そこまでにしたらどうかな！？おばさん困ってるよ！？」

すると男は震えながら言った

男「じ、じゃあ俺はどーすりゃあいいんだ・・・家族を置いてあの世にいきたくねーよ！！！！うあああああ！！！！」

なにがどうなっているのか自分にもわからない、とにかくまとめよう

ホリーズン「なにがどうなっているのか詳しく聞かせてください、できることなら何でもします」

つとと言うと男は少し落ち着き壁にもたれた

男「お前違う国からきた旅人か・・・なら話そう、昔この国は美しい泉と自然がある美しい光の国だった・・・あの王様が来る前は・・・だがそれをたくらみ自分のものにしてしようとやってきた王様は自然を売り飛ばし泉をぶち壊して大きな遊園地を作った、もちろん金目当てでなあ？、だがそれは予想以上に金がかかる、借金まみれの

国に変わってしまったそして俺たちが住んでいるラバールクから一日500万ほどの大金をみんなひとまとめにしてすいとつてやる、一日も出さなければこのラバールクに住んでいる一人を殺す・・・次は俺だ・・・」

欲望にまみれた王様がここにいることがわかった

とてもひどい話を聞いたホリーズンは

ホリーズン「わかりました助けてあげましょう、まず遊園地を売りましょうそうしたら借金はすべてとは限らないが半分は潰せるはずです明日王様に会いに行きまよう」

すると男は肩を叩いて

男「王に会いに行くのはやめてくれ！・・・殺されるぞ・・・いや？まてよ・・・あいつならきつと助けてくれるはずだ」

つと男はポケットから地図を出した

男「どうせ会わしてくださいなど言っても牢屋にぶち込まれるだけだ、直接に会う方法おしえてやんよ、見ろ」

つと地図を広げた

男「噂なのだがここに王様の部屋まで続く小さい洞窟があるらしい、何のためにあるのかは俺にもわからないだがここまで行くのに非常にガードマンが多い、それを乗り越えるには闇魔法カメレオンが覚えていなくちゃならない・・・だが安心しろ！俺の父親闇の魔術師ルーズの名にかけてこの俺様バラシが闇魔法をみっちり教えてやるお前旅人さんだろ？どこかで必要になるもしれんからな！さあ俺についてこーい！」

つと手を引っ張られながらつれてかれた先はどこかの地下室のようだ

バラシは黒い服を着て丸いガラス玉を持ってきた

バラシ「けっけっけ……まずはお前さんの名前を聞こうか」

ホリーズン「ホリーズンです」

つと言うとバラシは少し驚いた顔をして

バラシ「そういえば……お前さん奴と顔がよく似ているな、まあいい今からホリーズンの心の奥底に眠る闇を出す少し痛い但我慢しろ？行くぞ！」

つと急に手をホリーズンの胸に突き刺した

ホリーズン「ぐ……ぐあああ……!!」

（お呼びかな？僕をよんでいるのかな？あは、あはははは！仕方ないね……）

ホリーズンはふんきが変わった

「ふふ……君が僕を呼んだのかい？君の名前は……？」

バラシ「バラシだお前は誰だ」

すると頭を抱えて笑った

バウイズン「くす……くすす……バウイズンだよ……僕を呼び出す君の力……闇の磁石でも使ってるのかな？」

すものか・・・闇がすべて、光は墮ちたり・・・くふはははははははははは！！！！）

黒い城につくと槍を持った二人が立っている

「貴様、王に何かご用か？」

「用がなければ去れ！」

つと冷たい言葉を言ってきた

バウイズン「僕は王と取引をしにきた者だここを通しておくれ」

二人は怪しげな顔をして門を開けた

「とうればいい、何を取引するかはわからんが生きて帰ってこれると思うなよ」

「ふっ、馬鹿め・・・」

バウイズンは門を通り二つ目の門へやってきた

そこにもまた槍をもった二人がいる

「持ち物検査だ・・・」

「調べさせてもらっぞ」

つと言い持ち物検査をされた

バウイズン「ぐふははははは！！どうだい？いたいだろ？これが闇、憎しみ、悲しみの痛みさ・・・お前にはもうこれがお似合いだ・・・」

つと左手で王の顔をつかみ闇の空間を作り出した

バウイズン「後ろをござらん・・・いままで君が殺した人たちが王を呼んでいるよ？くふふもつわかつてるだろ？ここが君の新しい世界そう「地獄」だよ」

王を闇の空間に押し込み入れた

王「ああああああああああ！！！！！！」

そのままずっと闇の空間に吸い取られていった

バウイズン「ふっ・・・よかつたねピエロ諸君今日からここは自由の身さきえるなりあばれるなりするがいいさ」

皆ピエロの仮面を捨てはしって逃げていった

(返せ・・・)

(返せ・・・僕の・・・体！！！)

バウイズン「嫌だね君のものじゃない僕のものさ君は幻想ださつさと消え……ぐっ……うあ!!!胸が……」

(カエセ……カエセ……カエセ!!!)

バウイズン「な、なにを……やめろ……だめだ……っ……」

バウイズンは心の底へと落ちていった

ホリーズン「はぁ……くっ!……苦しい……」

向こう岸からバラーシがやってくる

バラーシ「ホントにやっちゃったのか……まってる今牢獄に入れられている奴らを解放しに行く!お前はそこで寝ておけ!」

つとバラーシは地下へと走って行った

ホリーズン「はぁ……はぁ……だめだ……前が……みえな……く……」

そのまま目を瞑り倒れていった

思い出せない

眠りについた・・・

懐かしい感じた、まるで暖かい光に照らされるような

夢の中で落ちていく自分は何も考えられなくらい癒しを感じる

「ねえ・・・どうして君は僕なんだい？」

「そんなのわからない・・・どうして僕は僕なんだろう」

「ここは僕の場所、闇の空間を広げるんだ・・・君が邪魔なんだよ・・・どうして？」

「それは僕も同じだよ・・・君はここになぜいるのか・・・光を友に我を満たそうとするのに君は邪魔なんだよ・・・どうして？」

『ソレハッツ!!!!!!!!!!』

パツと目を覚ますホリーズン

バラシ「お、目を覚ましたか！ついさっき遊園地を売り飛ばしたところなんだ！しかし・・・よく寝たな今日で4日目だぞ？そんなに疲れていたのか？」

つと言っ

4日も眠りについていたらなんて・・・不思議な事だ

ホリーズン「僕は・・・いつたい誰なのかわからないから旅をして記憶を取り戻そうとしている・・・だけどここには何もなかった、もうそろそろ行かないといけない、だからバラシ・・・王の代わりになってくれ」

そう言うとバラシはある小さなオルゴールを持つてきた

バラシ「これはなあ、自分の人生の曲と言って次自分はどこに行けばいいのかわかるのさ」

ホリーズンはオルゴールを手に取ると急にオルゴールが光を放った

頭の中で何かの曲が流れる

木の上に何かが浮いている・・・

パツと光は消えた

ホリーズン「どこだろう・・・とにかく木が多い場所へ向かえばいいんだ」

つと立ち上がった

バラシ「お前ここの国の本当の名前知らないだろ？ここは楽園の国、パラダイスカントリー覚えとけ！」

過去はそういう名を受けていた国であつたぐらい美しい場所だったのか

ホリーズン「そうか・・・わかつた！おぼえとくよ！、ここを去るには何かないのか？」

バラシは小さな指輪を出した

バラシ「それはツータントの輪と言って鳥の用に背中から翼を出すことができるんだ、だがよく聞けこれを使えるのは一日限りだが・・・まだ一日たてば使える、さあゆけ！自分の真実を知りたければ歩むんだ！」

ホリーズン「ありがとうバラシ！僕行くよ真実をつかみに！」

ドアを開けて指輪を指にはめたすると背中から黒い翼と白い翼が生えた

空を見上げ飛んで行った

国からどんどん離れていく

なんだか不思議な感情がでてくる・・・

心が何かを指示するかのよう

そのまま揺られて空を飛ぶといきなり翼の存在が薄くなっていく・・・

・

パツツ!!

ホリーズン「え?・・・うあああああああ!?!?!?!」

翼が消えて空から舞い降りる

.....

「我が息子は今どこへ・・・闇の身をつぶし光の身を手に入れたのか・・・」

「安心してください・・・あやつはいつかここへ戻ってくるでしょう・・・その時に・・・」

「ああ・・・2人を無にしよう」

.....

何かを求めている・・・何だろう？

いや？もしかしたら求めているのは僕ではない・・・心なのかもしれない

ドボーン！.....！

ぶくぶくぶくぶく.....

目を瞑ったままどこかへ続く闇へ

このままあの時と同じように・・・

ホリーズン（いや！！まだ行ける！！！！！！）

気がつけば海の中であった

上へと上がる

ホリーズン「ぷはー！・・・そうかもう一日たったか・・・あ・・・
」

向こう岸に船が見えた

助けてもらおうと光をスコールサインにして空へ飛ばした

船がこちらに向かってくる

ホリーズン「助かったよよし近づこう」

っとホリーズンも船に近づいて行った

船からはしごが下りた

「そこを上げー」

上った先には剣を構えた海賊がいっぱい居た

「お前あそこで何をしていた？」

ホリーズンは指輪を見せながら

ホリーズン「空を飛んでたら落ちてしまっただけでねしかし助かったよ・
・えーと・・・・」

奥から女の赤い海賊の服を着た者が現れた

ランツ「ここはトレジャー号そして私が海賊王のランツだ！久しぶりだな！・・・・えーとあれ？お前名前は・・・・忘れてしまったよ、すまないな」

ホリーズン「あれ？僕あなたにどこかで会いましたか？」

ランツ「はー？なにをいつてんだい恩人さんよー！私だよわーたし！あの時2回くらい救ってくれたじゃないか？忘れたのか！」

つとづが記憶にはどこにもないたしかに初めて会ったはずだ

ホリーズン「ごめん、僕は今記憶を探して旅に出てるんだそのうち思い出すよそれまで待つててくれないか？」

ランツは背中を向けて

ランツ「まったく・・・・つまらないなお前は・・・・」

つとづいきなり不思議なことを言った

するとランツは笑いながら

ランツ「うっはははは！似てたか今のお前をマネしたんだぞ！思い出したか！？」

そんなこと言った覚えもない

ホリーズン「思い出せないよ……んー……」

ランツ「そうか！きつとお腹が減っているんだな……あれ？食いしん坊だったっけお前？」

すると大きな声でしたっぱが言った

したっぱ「ランツさん！船を動かしましょうよー」

したっぱ「まだですかーランツさーん」

ランツ「しかたないな……しゅっぱーっ！」

船が動き始めた

ランツ「そうだお前も連れてってやるもしかしたら思い出すかもしれないあそこなら……まっ今日はここでゆっくりして行け腹も減ったろ？船の中にいっぺー飯おいてあるから食べ」

ホリーズンは走って船の中へと行った

ホリーズン「ありがとう！ちょうど腹減ってたんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5088j/>

黒旅

2010年10月9日03時58分発行